

○仏像の種類

① 如来（にょらい）

仏教の中での最高の存在



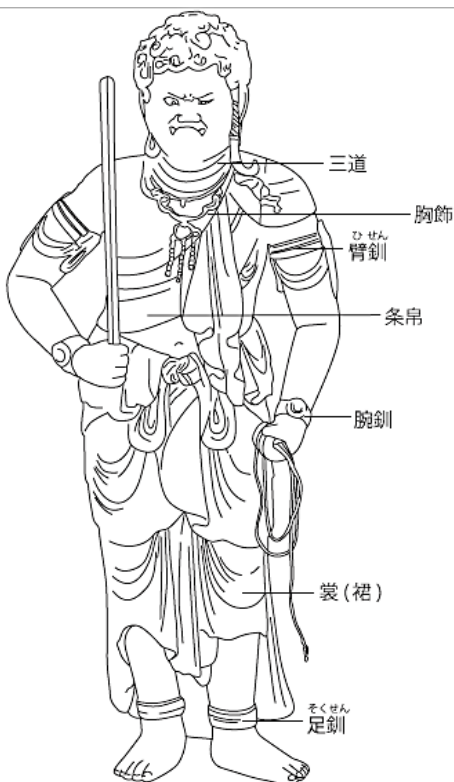
② 菩薩（ぼさつ）

さとりを求めて修行をしながら、人々を救い導く



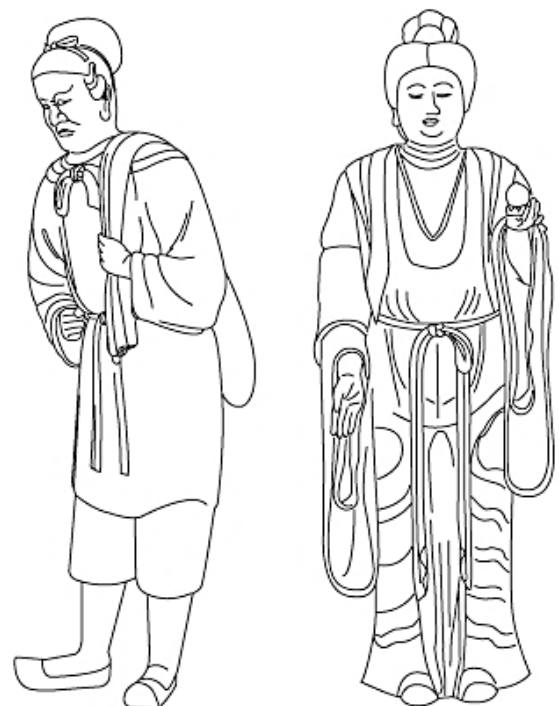
③ 明王（みょうおう）

如来の命令を受けて魔を破り、正しい道に導く



④ 天（てん）

古代インドの様々な神々が仏教に取り入れられたもので決まった姿はない



資料集

こんごうきしぞう
金剛力士像

東大寺南大門の正面から見て門の左側には阿形像、右側には吽形像が安置されていますが、これらは鎌倉時代の天才的仏師（仏像を造る職人）である運慶が指揮をとり、快慶らとともに彫り上げたもので、門が完成した後 1203 年にわずか 69 日間の製作期間で造り上げられたと言われています。



るしやなぶつ
盧舎那仏

聖武天皇は、災害や政変、反乱などが相次ぐ当時の社会不安を、仏の力によって解消しようと、全国に国分寺の建設を進める一方、大仏造立をはじめました。東大寺の本尊として世界最大の金銅仏盧舎那仏の造営が始まり 752 年に開眼法会が盛大に行われました。



過去の人々の遺産を あずかる場所

現在の人々とともに 守る場所

未来の人々へ 伝える場所



仏像関連基礎知識 「仏像の姿に伴う用語」 抜粋版

○衣文（えもん）

衣のひだのこと。その特徴は時代などを示し、仏像を見る際の見どころのひとつになります。

○金色相（こんじきそう）

仏の体は微妙に光を放っているとされており、仏像に光沢をつけることで仏の体から放たれる光を表現したもののことです。

○三道（さんどう）

仏像の首の前面に刻まれた3本の線。仏の肉身の円満な様子を示すものです。

○条帛（じょうはく）

菩薩や明王などが、左肩から右脇へのまるでたすきのように体に巻いている、1枚の細く長い布のことです。

○天衣（てんね）

菩薩や一部の天部などが肩からかけてまとっている1枚の細く大変長い布。肩から腕にかかり、そこからひらひらと体の周りに浮遊しています。

○肉髻（にくけい）

如来像の頭部にある半球状の盛り上がり。肉髻と螺髪（らはつ）をもつものは如来に限られます。

○納衣（のうえ）

如来が上半身に巻き付けるようにしてまとっている1枚の大きな布のことです。

○白毫（びやくごう）

如来像や菩薩像の額の中央にある白い半球状のもの。聖なる印。通常は水晶で造ります。

○裳（も）

1枚の布を下半身に巻きつけるようにして、巻きスカート状にまとうものです。如来、菩薩、明王、天部の一部が身につけています。

○螺髪（らはつ）

如来像のみが見せている頭部に並んだ丸く小さな粒。そのそれぞれは、1本1本の巻髪をあらわしています。

○腕釧（わんせん）

菩薩像や明王像をはじめとする仏像の手首につけられた飾り、ブレスレットのことです。上腕部にある飾りは臂釧（ひせん）、足首にある飾りは足釧（そくせん）といいます。